関連学会印象記

第25回米国ショック学会

真弓俊彦*

アメリカショック学会は毎年アメリカの秀逸なリゾート地で開催されますが，今年はモンタナ州のBig Skyというスキーリゾートで2002年6月8日から11日まで開催されました．標高が富士山と同じ程で，前回1994年に開催された際には6月でも15 cm程雪が積もり，帰国の際に慌てた先生方も見えました．今回も学会中，毎日雪が降り，特に第3日目には一日中雪で，やはり15 cm程の積雪がありました．

この学会はアメリカのショック学会ですが，毎年，アメリカのみならず，ヨーロッパ，日本など世界各国からショック，侵襲学などに興味のある医師，基礎学者が約300名程参加し，連日，活発な討議が行われます．特にアメリカからはPh.D.が多数参加し，アメリカのこの分野における層の厚さを象徴しています．ショック学会というものの，その副題に"Injury, Inflammation, and sepsis: Laboratory and Clinical Approaches"とあるように，学会の内容は，サイトカイン，NO，エンドトキシン，外傷等の種々の侵襲と生体反応に関連するメカニズムやその治療法など基礎から臨床まで幅広く扱われます．

シンポジウムは3つあり，"Critical Receptor / Ligand Interactions in the Pathogenesis of Shock", "Novel Approaches to Current Problems in Critically Ill Patients", Pathogenesis, Manifestations and Current Therapies of Thermal Injury Induced Lung Dysfunction"でした．また，ワークショップは"Current Status of Funding in Shock / Trauma Research", "Controversies in Shock Outcome"の2つで，その他，優秀な演題の口頭発表のミニシンポジウムが4つありました．いずれも聞き応えのある内容で，最新の知見が紹介され，いつものことですが，この学会に参加するとこの分野での知見をupdateでき，リサーチのヒントを多数得ることができます．

今回特に印象に残ったものとしては，サイトカイン，接着因子，NOなど多数のメディエーターに対する生体反応データをコンピュータに組み込んで，エンドトキシンなどの侵襲を加えた場合の，それら全てのメディエーターを考慮した上での，ある特定の細胞群の反応，例えば，ある細胞はapoptosisをある細胞はnecrosisを，またある細胞は分化増殖するさまをコンピュータグラフィックスで表す試みです．この方法を用いると，種々のメディエーターの複雑な相互反応を総合的に評価できること，さらに実際の細胞を用いることなく相互反応を予測しうることが可能となります．

一方，恒例のプレジデンシャルランという早朝ランニングが今回も開催されました．高度3000 m，気温0℃，雪が降りしきるなかでの開催でしたが，

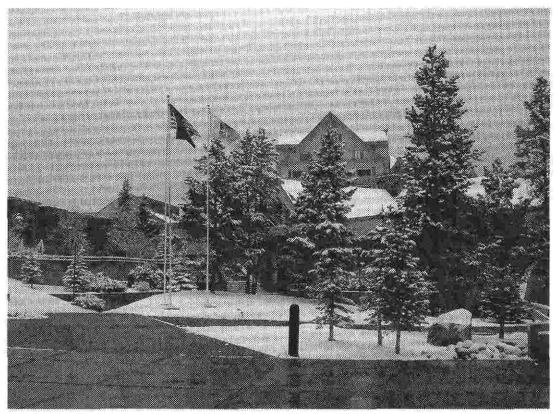

図　学会会場となったBig Skyリゾート
6月でも毎日雪が降り積もった

*名古屋大学医学部救急部，集中治療部

Presented by Medical*Online

浜松医大の第2外科の海野直樹先生は上位入賞という好成績をおさめられました．

今回の会場の近くには，世界で初めて設置された国立公園であるYellowstone National Parkがあり，学会のスケジュールが半日の日には，参加者の多くが訪れその絶景を楽しんでいました（残念ながら，私は気力がなく行けませんでしたが）．

今後，この学会に，日本からも多数の先生，特に，基礎系の先生が参加され，この分野における日本での研究を更に発展して頂けるよう願ってやみません．来年の米国ショック学会はアリゾナ州フェニックスTapatio Cliff Resortで6月に開催され，4年に1回開催される国際ショック学会がブラジル，リオネジャネイロで2003年9月7日から10日まで開催されます．学会に関する資料を御希望の方は日本ショック学会事務局の千葉大学医学部救急医学講座　平澤博之教授か筆者まで御連絡下さい．

Presented by Medical*Online